文明の転換期――人類の過去と未来

伊東俊太郎

※本稿は２０１５年９月29日、東京・新宿区のＴＫＰ市ヶ谷カンファレンスセンターで行われた講演をまとめたものです。

西洋文明中心史観の限界

「地球文明への道」を考察するためには、まず地球文明なるものの歴史を顧みなければなりません。ところで、今までそのような考察が一体あっただろうか。地球全体を見て、そして人類史や世界史の全体を見て考えるということがなされただろうか。今、「地球文明への道」というテーマが出てきていますが、地球文明なるものを本当に考えているような枠組みがこれまであったでしょうか。私は、それは無かったと考えています。

今までの世界史は、西洋中心の世界史で人類の世界史ではなかった。少し前までの人類史は西洋中心です。典型的な例として、哲学者ヘーゲルのものがあります。彼の世界史は有名で、日本の西洋史学にも大きな影響を与えたのですが、それは、大体こういう構造をとります。

古代オリエントのエジプトやバビロニアは、素朴な文明としてはあった。しかし、本当に自由なのはギリシャ文明だとして、ギリシャから始める。そして、それを受け継いだのが西ヨーロッパである。このギリシャから始まるヨーロッパ文明が、その後、世界に大きく拡大していった。これが世界史であり、人類史であるという考えです。

そこでイスラームは、世界史の中に正当な地位を得ていない。インドはどうなっているのか。あるいは、中国はどうなっているのだろう。ヘーゲルによれば、これらの地域では「世界精神」が眠っている。目覚めていない。ヨーロッパだけは目覚めた。だから、それが世界に拡大していった。これが世界史である――こういう見方です。このような歴史観が長く世界史の枠組みとしてあったと思います。西洋以外の文明においては、そういう「世界精神」がまどろんでいる、眠っているものとされたわけです。

けれども、これは明らかに間違っていた。19世紀はほとんどこれで、20世紀初頭でもまだこの見解が流布していたと思いますが、今や本当の意味で人類全体の地球文明の歴史が再建されなければいけない。ヨーロッパ文明もある、中国文明もある、イスラーム文明もある、インド文明もある、日本文明もある――こうしたいろいろな文明がある中で、それらを肯定的に取り上げて見て、全体を人類の発生の時から考えていくような新しい枠組みを作り上げなければいけないわけです。しかし、今までそれを正面から取り上げなかった。

しかし、そういう西洋中心主義を打破する第一歩が、トインビーあるいはシュペングラーの「比較文明論」によって打ち出された。西洋の文明だけではない。昔から文明は多元的にあった。そして、それは全部、独自の意味をもっていて発展していったのである。それらを全体として公平に見なければ、不十分である。一部分に過ぎない西洋の発展だけに光を当てた世界史ではダメではないか――こういうことをトインビー、シュペングラーが言い出したのです。つまり、それが「比較文明論」です。私が会長を務めた国際比較文明学会は、トインビーが創立に関わった学会であることもお

講師は、日本を代表する文明史家。比較文明学会会長、日本科学史学会会長、地球システム・倫理学会会長などを歴任し、国際比較文明学会から“Mr. Civilization”の称牌が贈られている

伝えしておきます。

そのように、この地球上に存在した様々な文明を、西洋文明だけでなくて、公平に比較・考察していこうということを主張して、トインビーは『歴史の研究』などを書きました。それが、ヘーゲルの一面的な歴史を突き破って、人類の文明史に向かう突破口を作ったのだと思います。しかし、今日はトインビーの話ではなくて、私のことを話します（笑）。

人類文明の5大革命

私は、トインビーやシュペングラーには、もちろん賛成です。トインビーは、21の文明を認めました。シュペングラーは、世界に8つの大きな文明があるという。それらの文明は誕生し、成長し、完成して死んでいくけれど、皆、独自に発展していくという「縦割りの比較文明論」です。特にシュペングラーはそうです。それぞれの文明が自己の魂をもって、春夏秋冬と似たような段階を経て発展し、没落もしていく。トインビーの場合は、〝文明の親子関係〟を認めるところがありま

すが、基本的には縦割りです。

私は、そうではありません。ではどう違うのか。私の地球文明史は、その多元的文明論に賛成しつつ、ヘーゲル以来の西洋中心の文明史を超えようとする真の意味での全人類の地球的文明史です。世界でさまざま文明がありましたけれど、横割りと言うか、通して見ると、それぞれの文明が同じような変容、まさに共通のトランスフォーメーションをしているのです。つまり、諸々の文明が相互に影響し、関係し合いながら共通の変換期を経て今日まで来ているということです。では、どんな共通の変容をしたのか。それが人類文明史の私の5革命説です。

「人類革命」から始まり、「農業革命」「都市革命」「精神革命」、そして「科学革命」までが現代です。そして6段階目の「環境革命」は今起こっている。つまり、それは今とこれからの問題です。この5革命説は、日本発の新しい地球文明史の枠組みと考えてよいと思います。まだ、世界で誰も言っていません。

そのエッセンスは、過去の5革命を見ると、まず根本的で文明史的な変革が地球上のあるところに起こることから始まります。それは、一カ所で起こる場合もあるし、幾つかの場所で同時並行的に起こることもあります。それを文明革命の「先駆地域」(pioneer area)と言いましょう。それが起こると、その地域に留まらずに、じわじわと地球上に広がっていくのです。そして全体をしっかり変えてしまう。その革命で大きく人類史を変えてしまう。こういうことが起こっているわけです。

そういう、地球全体の文明のあり方を変えてしまう変革期がこれまで五つあった。そして、現在の問題である「環境革命」は、これからの問題だから最後に少し詳しくお話しします。

その前に、5革命を簡単に説明したいと思います。「それは何か」「どこで起きたのか」「いつごろ起きたのか」という3点に焦点を当てて考えたいと思います。

① 人類革命：すべての人間の起源はひとつ

最初の「人類革命」は、「Anthropic Revolution」と

私が名付けました。これから世界的に伝えてゆくためには、英語まで考えておかなければいけません（笑）。その「Anthropic Revolution」を一口で言うと「人類の成立」です。人類史ですから、やはり人類の始まりから話を始めなければなりません。

では、それはどこで起こったのか。簡単に言うと、それは東アフリカで起こりました。アフリカは重要で、人類の原郷・故郷なのです。あそこで人類は誕生したのです。霊長類から分かれ出て、そして直立二足歩行を始めた。霊長類のゴリラとかチンパンジーは本来四つ足で歩いていますが、それが直立歩行することによって手と足が分かれた。これは、すごい変革です。アフリカには大地溝帯というものがあり、地面が大きく陥没して地溝となったものが南北に帯状に続いています。その地域にある、ケニアの西のあたりやエチオピアとかで、人類の最も古い骨が集中的に発掘されている。大変に不思議なことです。

なぜ直立歩行が始まったのか。まず気候変動によって森が消えるわけです。森が消えると、木の上にいた霊長類がいろいろなところに移動しなければいけません。その中に、移動ではなくて地上に降りたものがいるのです。降りてしまったら、立って周りを見なければならない（笑）。そうでなければ、他の大きな動物に食べられてすぐに死んでしまいます。

また、おそらく、この直立歩行は餌を持って歩くということと大いに関係があると思います。今、チンパンジーを見ても、餌を持っている写真を見ると二足歩行しています。地上に降りて直立して歩行した人間は弱いもので、ライオンなどに比べたらすぐにやられてしまう。それを防ぐために、手が空いたので道具を作る。〝チンパンジーも道具を作らないことはない〟という説が出ています。私も賛成ですが、非常に原始的なものです。人間が作ったのは石器です。肉を切ったり、刻んだりする道具を作ったのです。手が空くというのはすごいことです。両手が使えるということです。例えばですが、人間は人差し指と親指を使って、ものをつかむことができる。しかし、チンパンジーは人間に比べて親指が発達していないので、それができません。

その一方で、直立歩行には危険もある。森の上のほうにいれば、ライオンは登れないから安全です。しかし、降りたら危ない。そこで一人では危ないから集団を組むのです。初めて出現した人類は集団を組みました。集団を組むと、コミュニケーションが必ず発生します。コミュニケーションをしなければ集団は成り立ちません。「一緒に行こう」「逃げろ」「危ない」とか、さまざまな言葉が必要になるのです。チンパンジーは、頭が良いが言葉をもってはいません。言語によるコミュニケーションができない。これが大きな「人類革命」の特徴です。道具の使用と言語の使用によって、大脳が発達していくのです。こうして大脳が緻密になっていって、人間になっていくのです。

この人間は実は4種類います。最初に立ち上がったのは「猿人」です。猿とも人間とも言えないような「猿人」――アウストラロピテクスです。「猿人」は、700万年前にアフリカで生まれたとされています。この「猿人」は、ずっとアフリカ大陸だけにいました。

次に「原人」というのが出てきました。これが50万年くらい前に生まれ、初めてアフリカを出て世界に広がった。そして、北京原人となり、ジャワ原人となった。このように「原人」が世界に広がっていった。

次に「旧人」という段階になります。これはネアンデルタール人とも言います。そして最後に「新人」。これはホモ・サピエンスと言います。我々は皆、ホモ・サピエンスですが、20万年くらい前にまたアフリカで成立しました。アフリカは2度も人類を創り出している。「新人」もまた、20万年ぐらい前に東アフリカで生まれたということが最近分かってきた。

その「新人」のホモ・サピエンスが、8万年から5万年前ほど前にアフリカから脱出します。5万年前頃には、ほとんど脱出を完了したと言われています。そして、1万年くらい前までに、あっという間に世界に広がった。「新人」は「旧人」に比べて、幾つか重要なことがありますが、そのひとつとして道具が非常に緻密になったことが挙げられます。細石器という細かい道具を使用し、おそらく言語も精密になった。それがアフリカを脱出して世界に広がった。

ですから、中近東の人も、中国の人も、ヨーロッパの人も、もちろん日本人も、たどっていけば皆、このアフリカに行き着きます。皆、元はひとつで「新人」の起源に至る。どうしてそんなことが分かったのかというと、集団遺伝学でのミトコンドリア・ＤＮＡの研究が進んだことによって、それをたどって行くと皆アフリカに遡ることができるのです。これは驚くべきことです。

昔、よく「人類はひとつだ」と言われていたけれども、それはいわば単なるスローガンでした。しかし、今では本当にひとつということが分かった。人種なんてものは実はないに等しいのです。そういうことが分かってきたというのは、すごいことです。

今や、アフリカを何年ごろに出た人がインド洋の海岸をどのように伝っていたか、（インド洋の）アンダマン諸島を経て、南の方からどうやって日本列島に来たのかということまで追跡されるようになったのです。もちろん彼らは北からアメリカ大陸も目指していました。また、中近東やヨーロッパ、東アジアを経てオーストラリアへも移って行きました。こうして、瞬く間に全世界に広がっていきました。これが、「新人」なのです。

つまり「人類革命」とは、人類はひとつであるというところから出発しなければならない。事実としてそうなのです。まだこのことは一般的に言われていないので、知っている人はまだ少ないかもしれませんが。これ以上このような話ばかりをしていると、「人類革命」だけで全部終わってしまいますね（笑）。だから次へ移りましょう。

〈5革命説〉		
1	**人類革命**（Anthropic Revolution）	700万年前～
2	**農業革命**（Agricultural Revolution）	紀元前１万年前～
3	**都市革命**（Urban Revolution）	紀元前3500年頃～
4	**精神革命**（Spiritual Revolution）	紀元前500年頃～
5	**科学革命**（Scientific Revolution）	17世紀～

※年代については様々な表記が可能ですが、本講演に即した範囲での概略を示したものです。

② 農業革命：定住へ、そして蓄積へ

次に「農業革命（Agricultural Revolution）」ですが、これは農耕と牧畜の開始です。牧畜と農耕には、食糧の能動的な確保という共通した要素があります。このふたつは一緒に発生して、やがて農耕民と牧畜民に分かれていきます。それまで人類は何をやっていたかというと、動物を捕って食べる狩猟をやっていました。それから、木の実などの自然のものを採って食べる採集をしていた。季節ごとに、採れるものを探しながら、いろいろなところを回っていたのです。それから、魚も捕って食べていました。そういうように人類は長い間、今そこにあるものを取って食糧にして生き延びていたのです。ところが1万年と少し前に、地球にヤンガードライアス寒冷期というのが起こります。それによって木の実が成らなくなる。そして動物も少なくなって、皆が困ってしまった。ここで、どうするかです。

〝無いならば、我々が作ろう〟――これが「農業革命」です。つまり、野生植物を栽培化して作っていこうと。これが農耕の開始で、人類が成し遂げた2番目の大きな変革です。これがなければその後の人類はありえません。農耕は生き延びてゆく食糧の確保ですから。そして食糧を確保すると、従来にも増して「定住」が始まります。農耕というのは、今までの採集・狩猟社会のように、グルグルと回っていたのではダメで、一定の土地に定住してその土地を耕すのです。牧畜も、一定地域で動物を育てて、必要な時に食べるわけです。そういうことで、定住が起こったのです。定住すると落ち着いていきます。定住するから文化の蓄積が始まり、織物なども作られる。こうして「衣食住」の基礎ができた。そして、そうした文化を蓄積して、次の世代に伝えていくのです。また、石器を使っていた人類は、ここで土器を使うようになる。もっと進んでいけば陶器を作る。このように、農作物の蓄積が大きな変革をもたらすのです。

こうしたことが最初に起こったのが東南アジアです。簡単な農耕の始まりですね。この農耕は根栽農耕というイモの栽培です。イモは植えておけば育っていくので一番簡単です。イネのように複雑な作業はいりませ

んから。

2番目はパレスチナで成立して、それがメソポタミアに行きます。ここでの主要農作物は、もうイモではなく、ムギです。なぜならイモは腐るので保存が難しいのです。乾燥させるという手段もありますが、それを発見するのは大変なことです。このパレスチナ・メソポタミアが作った農作物の中心はムギです。ムギはたくさん穫れた時に保存ができるから、飢饉が起きてもそれで食べてゆけるのです。

3番目が中国です。これは最近になって分かってきたことですが、中国の長江の中流域でイネの農耕が始まりました。私たちはご飯を食べていながら、イネ農耕がどこで始まったのかは長く分かっていなかった。これが最近になって、やっと分かったのだからいやになりますね（笑）。

4番目は、アンデス山脈のあたりです。あの辺ではトウモロコシが中心でした。イネでもなければイモでもなく、トウモロコシです。それにジャガイモの乾燥手段が発見されて、人々を養って維持していく重要な農産物となりました。

それから、もうひとつ付け加えなければいけないのは西アフリカです。マリという国がありますが、あの辺で雑穀と称されるヒエとかアワとかの農耕が行われます。それが世界に広がって、やがて入り混じってゆく。イネ農耕やムギ農耕もそうです。トウモロコシ農耕も南アメリカを中心に広がる。これらが広がって世界で混じり合うのです。世界を大きく分けると、東はイネ農耕圏、西はムギ農耕圏と言っていいと思います。

③都市革命：階級と文字の誕生

次は「都市革命（Urban Revolution）」です。一言で言いますと「都市の形成」です。まず、農耕が大規模化していきます。初めは雨水や、あるいはオアシスの水を使っていたのが、やがて大河のほとりに移り、豊富な水と肥沃な土によって、農作物の生産量が上がった。

「農業革命」の段階では、全員が農耕をやっていたのが、もう一部の人間がやればいいようになった。こう

して、農耕をやらない人も食べさせていけるようになり、都市民が出て都市が成立します。農耕がすごく発達した頃に、都市が点々とできていった。最初は大河のほとりですからチグリス・ユーフラテス川、ナイル川、あるいはインダス川――そこに最初の都市文明ができあがった。それから都市独自の活動が始まり、「社会的階層」が成立します。

ここで王が初めて出現します。この頃の都市というのは、都市国家という小さい国家で、必ず王がいる。これは新しい変化です。「農業革命」では、村長さんのような存在はいたかもしれませんが、王はいません。王は非常に大きな力をもった存在です。その下に祭司階層といって、その国の宗教に携わる僧侶階層が王の周りにできた。それから、書記階層という、ものを書く専門家が現れます。つまり知識階層と言っていいと思います。その下には、戦士階層という専門的に戦争をやる人もできました。

都市は富が蓄積される場です。都市文明というのはシステムで、ある都市とある都市が独立して存在しているではありません。ですから、自分のところに無いものを、よそから持って来たり、自分のところのものを他の場所に持って行くという交流が始まります。

そして、特別に良いものを作る職人階層が出てきます。「農業革命」では、農閑期に農民が何かを作るくらいで専門的なものではありませんでした。「都市革命」の段階では専門的職人が青銅器まで作った。それから商人が出て、今のように各地を渡り歩くわけです。それで、ますます豊かになっていくのです。

国家ができ、王が誕生した。それで次に何が必要でしょうか。それは文字です。「都市革命」の中で、文字の出現は実に大きい意味をもちます。王は法律を作らなければ国家を統治できません。つまり、口で言っているだけではダメで、「ハンムラビ法典」のように文字による法律が必要です。最初は王の業績などを文字で刻んだ碑が現れたわけですが、次第に、それで税金などの記録をするようにもなりました。楔形文字や甲骨文字などが「都市革命」によって誕生するのです。甲骨文字は、皆さんの使っている漢字の元となるもので

す。これをたどっていくと、殷の時代の「都市革命」の所産であることが分かります。

また、当時の科学もこの段階になって初めて文字に書かれて伝えられる。これが「civilization」で、文明と訳されるが、元の「civil」の意味は「市民」です。都市の住民のことです。だから、文明とは広い意味で都市化なのです。こうした文明の最初は紀元前３５００年頃の「メソポタミア文明」のシュメールです。その次が紀元前３０００年頃の「エジプト文明」。それから「インダス文明」で、これはインド文明の起源で紀元前２８００年頃に興りました。そして、紀元前２０００年くらいにできた中国の「黄河文明」です。その前にさらに「長江文明」があったことが最近分かってきました。

もうひとつは、紀元前７００年頃の「メソアメリカ文明」です。他の大陸と関係ないところで、トウモロコシ農耕を発展させて独自に都市文明を作った。メキシコやペルーのあたりですね。そこでの発展は、やがてインカ帝国にまでいきます。

④ 精神革命：東西で同時期に起こった魂の発見

第４は「精神革命（Spiritual Revolution）」です。今までの革命は食糧生産や社会階層といった外側のことですが、今度は人間の心の内側の変革です。これが紀元前５００年くらいを中心として、東西に並行的に起こる。これがまた面白いことです。

まず、ギリシャ哲学です。皆さん、ソクラテスをご存じでしょう。ああいう人たちが出てきて、魂の探求を行うのです。それから、中国での儒教の成立です。これは孔子を中心としたもので、彼は「仁」を主張しました。インドではゴータマ・ブッダによる仏教の成立がありますね。

イスラエルでは『旧約聖書』の第二イザヤやエレミヤなどの預言者が現れます。これはイエス・キリストにつながります。キリストはこの時期よりも遅れて現れますが、その先駆者としての預言者はこの時期です。東西でほぼ同じ時期に、「精神革命」の担い手が、それぞれ独立して現れます。これが、人類史における新たな大転換期を作りました。なぜなら現代にまでつなが

る人間の精神史は、この時から始まるからです。「精神革命」とは、世界の精神化の原点なのです。

⑤ 科学革命：「より多く」「より効率的に」の時代

次は「科学革命（Scientific Revolution）」で、これは近代科学の成立です。科学一般ではありません。科学そのものはエジプトの時代からありましたし、中国にもイスラームにもありました。しかし、ここで言うのは近代西欧科学です。今、近代科学技術が環境汚染などさまざまな問題を起こしているという話があり、その危険な面が顔を出してきました。これを何とかしなければ、人類は生き延びられないという状況に我々は生きています。しかし、この近代科学が誕生したことは、すごく大きな変革で、私たちは現実に科学技術の恩恵をこうむっています。例えば、近代医学によって長生きができるようになった。またいろいろなことが分かってきたし、電気その他を利用して、たくさんのことができるようにもなった。そういうことを考えると、良いことをたくさんやってくれている。

近代科学は、この世界の法則を明らかにしてきました。ここでは、コペルニクス、ガリレオ、ニュートンの3人を挙げておきましょう。コペルニクスは地動説を唱えました。それまでは天動説で、地球は中心であり動きません。天のほうが回っていると、ずっと言われていた。ダンテの『神曲』を読むと、それが分かります。魂は幾つもの天球を通って天国に昇って行く。あれは古い世界観の反映です。コペルニクスは「そうではない」と。太陽が中心にあって、その周りを地球が回っている。地球は、太陽の周りを1年で1周し、しかも1日で自分自身でも回っている――つまり、2重の回転をやっていると言った。これには、当時の人は驚いたでしょう。

ガリレオは、この地動説を受け継いで、カトリックの僧侶たちに憎まれて裁判にかかってしまう。でも、ガリレオは地上の運動法則を明らかにしました。物体の落下を研究して、落下速度は落下時間に比例し、落下距離は落下時間の2乗に比例して増えていくことを、数学を使いながら精密に表しました。

ニュートンはもっとすごいことをやりました。それは石が落ちていくのと、地球が月を引っ張っているのは同じ力によるということを発見した。これが万有引力の法則です。地上の法則と天上の法則が同じであると。これは本当にすごいことで、それまでの世界観が一変しました。

こうした発見がなされたのがヨーロッパです。これが世界に広がってゆきました。近代がヨーロッパの時代であるゆえんなのですね。つい最近までヨーロッパの時代だったでしょう。皆、ヨーロッパの模倣をする。ヨーロッパ中心主義というのは、こうしたところから出てきました。「科学革命」はヨーロッパだけで起こりました。これまでの革命は、幾つかの場所で並行的に起こったと言いましたが、「科学革命」だけは中国でもイスラームでも起こらなかった。では、どうして「科学革命」がこれほど強い意味をもったのかというと、それは「産業革命」につながるからです。「科学革命」は「産業革命」も潜在的に含んでいます。「科学革命」は17世紀です。その後、18世紀に「産業革命」が起きて、蒸気機関などがどんどん発明された。そして、その「産業革命」がさらに続いて、今日の「情報革命」につながっているわけです。

「科学革命」「産業革命」「情報革命」は一続きの話です。私は「科学革命」にまとめているから、あえて「産業革命」「情報革命」を入れていません。それらは「科学革命」の中に入っていると考えていいのです。それがどんどん展開していった結果です。

「科学革命」は知識の生産です。「産業革命」はエネルギーの生産をより効率的に、より多くやりましょうというものです。「情報革命」は情報の処理を大量に、そして効率的にとなります。つまり、対象は違いますが、「より多く」「より効率的に」という点で、それぞれの目指す方向は皆同じなのです。

環境革命——科学技術の進路変更を

では、その先を追うだけでいいのかというのが、今日の問題です。私は根本的変革として、「情報革命」をあえて採らずに、「環境革命（Environmental Revolution）」

を挙げています。環境問題には、現代の諸問題が集約されているからです。これをもたらした文明のあり方を根本的に改めていく。それが「環境革命」です。「情報革命」ももちろん重要ですが、それをどんどん追っていけば人類の未来があるのか――これを、一回問うてみなければいけない。

「情報革命」というのは、速いですよね。何かひとつできると、すぐに「新しい機能をつけましたから、古いものは捨ててください」と（笑）。そして、また新しいものを買って来る。大量生産、大量消費、大量廃棄になっている。原発もそうです。とても忙しい時代になった。ついていけないと、自分がダメになったと思ってしまう。この「産業革命」によって生じた富によって、資本主義ができて世界を席巻してきたのです。力の論理で、それが植民地主義となり、帝国主義となって、世界を巻き込んでいった。日本も黒船による開国でそれに巻き込まれました。

そして今、我々は「環境革命」の渦中にあります。「産業革命」によって「技術革命」が行われ、そして科学技術革命になった。便利だから良いということで、もっとたくさん、もっと効率的にと進んできたことで具合が悪くなってきた。そして、その果てに地球を壊すという、これまで考えたこともないようなことが起こり始めた。日本でも水俣病をはじめ環境汚染として顕在化しました。科学技術の結果が、人間の幸福の土台を壊した。科学者たちが「科学は絶対に正しいのだから、つべこべ言わずについてきなさい」と言って、皆がついて行ったら、とんでもないことが起こったのです。一番大きなことは「マンハッタン計画」から始まった核兵器の出現でしょう。

私は、核兵器の開発の本を読んでびっくりしました。「マンハッタン計画」が進められたアメリカのロスアラモス国立研究所での話です。私は実際にそこへ行きましたが、本の中には、科学者たちが「自分はこれだけのことをやれと言われて、一生懸命にやった」「こんなに見事に成功した」という話ばかりが羅列されていました。しかし、もしも核兵器が作られたらどういうことになるのかということが、頭の片隅にも浮かんでい

ないのです。

「専門家という野蛮人」です。これは私の言葉ではなくて、スペインの哲学者オルテガの言葉です。言い得て妙です。専門家が野蛮人になる可能性がある。つまり、科学者が自分の業績のことだけ考えればいいと思う。そして、科学者集団も人類全体のことが考えられない。「核兵器ができたら、20万人の人が一遍に生きながら死ぬのだ」（広島・長崎）ということを考えもしない。これは恐いことです。

機械論的世界観を超えて

私は「科学革命」には、ふたつの大きな柱があると考えています。その両方とも、今や変えられなければいけない。ひとつは世界観の問題です。デカルトという有名な哲学者がいます。あの人が作った「機械論的世界観」というのがあります。それは、世界を機械として見る。命のない機械であり、単なる幾何学的な対象だと。この考えで世界をズタズタにしていくと、色も臭いもない粒子になる。この粒子のダンスで世界を説明するわけです。それで通そうという考え方です。デカルトは哲学者で、科学の基礎を考えた人ですが、これが、第一に考え直さなければいけないと私が思っている点です。

この世界は機械ではありません、この世界は生きています。ですから「機械論的世界」ではなく、「生世界」すなわちバイオワールドです。世界を生きとし生ける生命として見直すべきです。自然は生きています。だから、甘く見て人間が支配しようとすれば、大変なしっぺ返しがあるでしょう。エネルギーもどんどん原子力でつくればいいとやってゆけば、地球も人類も放射能だらけになるかもしれない。

昨年（２０１４年）、東洋哲学研究所で講演（「宇宙から考える文明」）された東京大学名誉教授の松井孝典氏が『地球システムの崩壊』（２００７年、新潮選書）という本を書かれています。その中に、「これまでと同様の発想で右肩上がりの豊かさを求めて人間圏を営むとすれば、人間圏の存続時間は１００年ほどだろう」とある。これは、驚くべき大胆な発言と思うでしょう。けれども、

私は理があると思います。

英国王立天文台の台長だったマーティン・リースも「1000年はいうに及ばず、100年すら人類は生き残れないかもしれない」と言っている。ヨーロッパを代表する科学者がこういう警告をしている。そんな時代です。皆さんは、明日があるように、100年後も、その次もまたあると思うでしょう。しかし、我々の次の次の世代のことを思えば、もっと真剣に考えなければいけません。

つまり、「環境革命」においてやらなければならないのは、「科学技術の進路変更」です。科学技術によって原発や核兵器が作られ、人類破滅の危機にある。また、どんどん生物の種が減るという生態系の危機もある。人類も、そういう絶滅種になるのかどうかという問題です。

科学はサイエンス（science）と言うでしょう。サイエンスというのは、ラテン語ではスキエンティア（scientia）と言って、その意味は知識です。ところが、これまで言ったように単なる知識だけではダメなのです。そうではなくて、その「知識」が地球の人類を含めた生物の生存を確保する「叡智」に変わらなければならない。これを科学者自身も、一般市民も一緒に考えていかなければいけない。

「自然支配」から「自然との共生」へ

「科学革命」のもうひとつのイデオロギーは「自然支配」ということです。自然は人間の所有物であり、これを人間のために支配し、コントロールし、利用していけばいいという、フランシス・ベーコンという人の思想です。「しぜん」の真ん中の「ぜ」の字を「げ」に変えてみてください。そうすると「しげん」になりますね。「自然」は「資源」になるではないかと。自然は単なる資源にまで貶められて、「あれは使える」「これは使える」と。これで人間の生活が豊かになればいいと思っている。しかし、もう随分豊かになっているではないですか。それをもっともっと搾取しようという。

そもそも人間は、どんな存在でしょうか。自然と対立するものではなくて、もともと自然の一部でしょう。

自然の発展の場から人間は出てきたのです。自然と対立するどころか、自然は我々の仲間であり、我々の母であり、源です。そのことを考えなければいけない。自然の支配ではなくて、自然との共生が重要です。

「成熟文明」へ、生き方を変える

最後に、文明のあり方の変革を言いたいと思います。文明というのは結局、人間の生き方だと思います。人間が地球の上でどうやって生きていくか――これが文明だと思います。ところが、私が大学生の時に習った文明の定義は、そうではなかった。アメリカのレスリー・ホワイトという文化人類学者は、文明の高さは、その構成員の一人当たりが使うエネルギーの消費量で決まると主張していた。つまり、一人ひとりが使うエネルギー量が多ければ多いほど、高い文明だという考え方です。私はそれを聞いた時、首を傾げました。

１９００年以降、人類の人口は3倍になりましたが、エネルギーの消費量は15倍です。ＧＤＰは21倍になっています。これは少し古い統計ですから、今はもっと多くなっていると思います。大量生産、大量消費、大量廃棄ということが当たり前になっている。この生き方を変えなければいけない。そこが根本になるだろうと思います。「産業革命」以来、「もっと多くのものを」「もっと効率的に」使っていきましょうという成長の論理しかなかった。そういうエートス、生き方が染みついてしまった。それでは人類社会が終わってしまうので、持続可能性の追求ということが言われ始めた。しかし、この「持続可能性」という言葉も、意味を取り違えている人が多いのではないかと思います。つまり、今のままのＧＤＰやエネルギー消費を持続させていくという意味ではないはずです。

来るべき世代に良きものを受け渡していくために、「社会」こそが持続可能でなければいけないのです。そのためには、成長一点張りの文明ではなく、もっとゆっくりと人間の内部も充足させていかねばならないのです。ところが、そこを取り違えて「今の成長をどこまでも持続させましょう。その手立てを考えましょう」ということになってしまった。

必要なのは成長文明ではなく、成熟文明なのです。現在、難民の問題、貧困の問題、格差の問題がありますが、これは成長一点張りの考え方では解決できません。むしろ、成長一点張りによって格差が生まれているのです。

我々は、来るべき世代に「安全で平和な世界」を譲り渡さなければなりません。我々の時代で地球を壊して、「後は知らない」というのは、とんでもない話です。例えば、原発のゴミをどこに捨てたらいいのか、分からないまま、どんどん原発を造って、「後の世代が何とかするだろう」と。そんなことをやっていたら、まさに人類の破滅です。今こそ、我々が真剣に考えなければならないときなのです。

（いとう　しゅんたろう／国際比較文明学会終身名誉会長）